

## 図書館協力の新展開

(中国国家図書館国際交流处处長 嚴 向東)

新世紀に入り、コンピューターネットワークなどの現代ハイテク技術が図書館の分野にも幅広く応用されるにしたがい、各国の図書館間のつながりはさらに密接になっている。同時に、情報のグローバル化の趨勢により、ネットワークに基づく全世界的な情報資源の共同構築・共同利用を実現し、相互に利益を得て共同で発展するという基礎の上に各国図書館間の協力を強化することで、初めてよりよい形で文化交流・協力ができるのだということ、各国は深く実感している。日中両国の国立図書館はそれぞれの国家の文化の重鎮として、長期にわたる交流と協力の基礎があり、多くの成果を得ている。今回の日中両館の業務交流で「図書館協力の新展開」をサブテーマとしたことは、両館がこの分野を重視していることを表している。

以下、当館が近年来、中国大陸以外の地区の図書館と展開してきた協力の状況を紹介する。

### 一、全世界の中国語文献資源の共同構築・共同利用の促進

中国語文献資源はこの上なく豊富で、世界各地に分散しており、特に中国古籍は非常に豊富であり、この文化宝庫の利用をさらに開発する必要がある。当館は世界的な中国語文献資源の共同構築・共同利用のシステムを確立し、中国語文献を統一された標準フォーマットによって全世界で共有し、広く読者のためにサービスを提供するための責任を担っている。

2000 年 6 月、当館は北京で、第 1 回「中国語文献資源共同構築・共同利用協定会議」を主催し、中国大陸、台湾、香港、マカオ、シンガポール、アメリカ、オランダなどの国家・地区の 42 の中国語図書館及び中国語資料を所蔵している機関から代表が参加した。この会議の意義は、具体的な協力項目によって、中国語資料を共同構築・共同利用すること、全世界の中国語図書館と中国語資料を所蔵している機関の交流と協力をすることを推し進めることである。この会議はこれまでに世界各地の中国語図書館が参加した中で最も幅広く盛大な会議であり、世界規模で中国語文献の共同構築・共同利用システムをつくり、全世界の中国語文献資源を共同構築・共同利用する計画の実質的な第一歩を踏み出すものだった。この後、引き続き第 2 回、第 3 回の会議が開催された。

## 二、図書館間交流と相互連携の強化

ここ数年来、当館と台湾、香港、マカオ地区及び外国の図書館の 2 館間あるいは多館間の協力交流の成果は著しく、協力の範囲と業務の交流も日増しに増大し、深化している。日本、韓国、シンガポール、タイ、朝鮮、モンゴル、オーストラリア、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、ハンガリー、ドイツなどの国家および、台湾、香港、マカオ地区の図書館とは、いずれも密接な連携と良好な協力関係を保っている。当館と日本の国立国会図書館で行なっている交流活動は既に 20 余年になる。毎年の交流のテーマは時代の発展と相互の関心のある問題によって決められ、毎年、新たな展開がある。双方による定期的で、良好な、一定規模の高レベルの相互訪問は、図書館協力の一つの良いモデルであり、両館の経験を相互に参考にしあい、事業の共同発展を積極的に推し進める役割をなしている。

現在、当館と韓国国立中央図書館、シンガポール国家図書館評議会などの図書館との間の交流は、貴館との交流モデルを参考にし、類似した高レベルの相互訪問協力モデルを作り上げたものである。当館の業務発展について言えば、さらに多くの国外の図書館とこのような定期的な高レベルの相互訪問の交流スタイルを希望しており、このために積極的に努力している。図書館協力の最も実質的な内容は、図書館の業務分野の発展と進歩を促進することであり、これらの協力はより密接になりながら各業務分野において全面的に発展してきている。

例えば：

1. デジタル図書館は未来の図書館の発展方向であり、これは現在、世界の図書館界の共通認識である。当館のデジタル図書館建設は既に 10 年近い歴史があり、この間、国際的交流と協力はきわめて重要なはたらきをした。2002 年に当館が開いた「デジタル図書館国際シンポジウム」はこのような交流の重要な具体例である。我々は、この分野の多くの専門家と学者をこのシンポジウムに招聘した。各館の交流と協力と、国際的なデジタル図書館の最新技術と直接触れることで、我々はやっとデジタル図書館発展の最新情勢と最新技術を理解し、中国デジタル図書館の建設に当たって、比較的高い段階のスタート地点を確保することができた。

2. 当館は近年来、社会・一般利用者サービスに力を注ぎ、どのようによいサービスを提供するか、国外の多くの図書館の示唆を受けた。中でも最も中心になるのは「人を基本とする」というサービス理念により、これまでの受身的サービスを自発的サービスに変え、利用者に全方向的な、個別化されたサービス（365 日利用サービス、24 時間ネットサービス）を提供することで、中国国家図書館の一般利用者サービスは短時間に顕著な成果を得ることになり、社会的にも好評を博している。

3. 2002年、当館はAleph500コンピューター総合管理システムを導入した。当館の業務フローは全面的に向上し、世界のトップレベルに達した。当館は世界各国の先進図書館との交流と協力を通じて、広く世界各国の図書館の状況を研究・把握し、当館が提供する各種の具体的な資料を十分に理解した上で、最終的にこのシステムを選択した。

4. 国際交流は古籍文献修復技術の向上と発展を促進した。中国国家図書館は90年代初めに「局部的な補修」を中心とする、まったく新しい敦煌遺書の修復法を制定した。これは、国外の敦煌文献の修復作業での経験と教訓を鑑みて、制定したものである。その後、この修復方法は国際的に通用する敦煌遺書の修復方法となった。国際交流により、私たちが国外の修復技術の発展動向を直ちに理解できるだけでなく、国外の修復担当者も我が国の修復技術の進歩を直ちに理解することになる。すなわち、国際交流は修復技術発展の途上で橋渡しの役割をしたと言える。

### 三．プロジェクトを通じた図書館協力の推進および共同発展

具体的なプロジェクトを通じて、特定の分野における2国間あるいは多国間の協力関係を積極的に進めることも、図書館間交流の主要な方法に挙げられる。このような交流の目標はシンプルで明確である上、成果も著しいものがある。各国間の図書館協力において、広く行われている方法であり、具体的な協力事業における発展に、重要な役割を果たすものである。

この分野では、当館と英国国立図書館の協力事業であるIDPプロジェクトが、際立った例のひとつとして挙げられる。1993年英国国立図書館において「国際敦煌学プロジェクト」略称IDP(International Dunhuang Project)が設立された。当初の目的は、文献目録作業に応用できる、館内利用と学術利用のためのリレーショナルデータベースを開発することにあった。当館は、10,000件の敦煌文献を所蔵し、英国国立図書館も大量の敦煌文献ほか中央アジア出土の写本を所蔵しており、両館とも広くこの領域で協力する素地があったのである。2001年3月7日、当館と英国国立図書館は、「国際敦煌学プロジェクト」の協力覚書を締結し、双方の敦煌学分野における協力関係を正式に開始した。

この事業の目標は次のとおりである：

- ・2006年までに、英国国立図書館、中国国家図書館が所蔵する全ての敦煌写本の目録をデータベース化し、大量の写本をデジタル画像化する
- ・IDPの双方向WWWデータベースにより、リソースを無料で英国国立図書館と中国国家図書館の利用者、全世界の学者に提供する。中国語のサイトは中国国家図書館に設置し、英語のサイトは英国国立図書館に設置する。

両館の協力事業は、2001年5月の正式発足以来、双方の密接な協力のもと、順調に進行している。

#### 四、人材交流の強化

図書館の人材育成と人材開発という重要な意義に的確に対応するべく、当館は人材開発の指針を提示している。すなわち、「全館的向上と重点開発」である。我々の方法は、相互に交流、学習し、共同して発展することである。現在、当館の予算は潤沢とは言えず、多くの館員を研修に参加させることは非現実的である。だからこそ、図書館間交流と協力事業の実効性を重視し、限られた費用を最も必要なところに使わなければならない。その中で非常に有効な手段として、国外の専門家、学者、技術者を当館に招請しての交流や講座の開催があり、当館では近年この種の講座が数多く開催されている。目的は明確であり、著しい成果をもたらしている。同時に、当館幹部職員の視野の拡大、より多くより進んだ図書館分野の知識を絶えず学習するため、当館は前後して、シンガポール、アメリカ、オーストラリア等の図書館と定期的な館員の交換と研修を開始した。また、その他の在外研修プロジェクトも積極的に展開している。これらのプロジェクトの発展は、双方に大きな利益をもたらし、一種の「相互受益」方式の協力プロジェクトと言えよう。2000年から今まで、計12名の専門職員と外国図書館との館員交換を行い、外国図書館からは計12名の専門職員が来館、研修を行った。

#### 五、技術輸出による人類文明の保護

当館の善本特蔵部修復センターは国家級の古籍修復センターである。国内の古籍修復界での声望は高い。以前から、当館の善本特蔵部修復センターは中国の伝統的な手作業による修復技法を守って基礎とし、現代の科学技術と結合させ、大量の中国の古籍と貴重書の修復に成功した。総数は6万件に達し、その中には著名な敦煌遺書（4-10世紀）、宋元善本（10-13世紀）、『趙城金藏』（13世紀）、『永樂大典』（14世紀）などが含まれる。大量の古籍貴重書は、ふさわしい環境のもとに保存され、利用に供されている。

当館の善本特蔵部修復センターは、相次いで、インド国立図書館、英国国立図書館、フランス国立図書館、香港、台湾等へ職員を派遣、修復技術を伝える研修クラスを設け、講演を行った。2001年、センターは古籍修復のために、モーリシャスに2名を派遣した。17～18世紀モーリシャスの文書の脱酸処理と修復を行い、この「瀕死」の文書を「新生」させ、同時にモーリシャスの文献修復技術の空白を埋めた。

2001年、当館は北京において、第1回「中文善本古籍保存保護国際シンポジウム」を開催した。この会議は、古籍修復事業の科学化、標準化、古籍修復事業の理論研究と修復の実践を推進する上で大きな役割を果たした。

## 六、所蔵資料を活用した展示会、中国文化の広報

当館の所蔵資料は浩瀚であり、特に貴重書の収蔵は代表的なものである。これらは深厚な中華伝統文化を伝えるものといえる。当館は何度も国外の図書館などとこれらの資料の展示会の共同開催を行い、国際的な文化の伝播に大きな役割を果たしている。今年の6月から7月、当館とシンガポール国立図書館評議会は、シンガポールにおいて「中国古代書籍史」の展示会を開催した。10月1日から12月31日まで、当館とハンガリー国立図書館は「中国古代雕版印刷珍品展」を共同開催し、ハンガリー首相、文化部長らが開幕式に出席、ハンガリー国立図書館史上でも初めて政府首脳が参加した図書館活動となり、ここにもこの展示会の重要な意義が見て取れる。現在、当館とシンガポールは、来年の展示会「鄭和の南海遠征」を計画中である。これらの展示活動は、各国の文化交流と理解を促進し、図書館事業の発展をももたらすものである。

## 七、積極的な各種の国際学術シンポジウムの開催と参加、学術発展の促進

2000年から、当館では毎年国際学術シンポジウムを開催し、図書館分野の学術発展を図るだけでなく、各国図書館間の連携をより密接なものにしている。2000年には、北京で第1回「中国語文献資源共同構築・共同利用協力会議」、2001年には、第1回「中文善本古籍保存保護国際シンポジウム」、2002年は「『永楽大典』編纂600周年国際シンポジウム」、2003年は「敦煌写本研究、遺書修復およびデジタル化国際シンポジウム」が開催された。2004年4月には「中国のソグド人 その歴史と経済」国際学術シンポジウム、10月には「地方文献国際学術シンポジウム」が計画され、2004年にはさらに当館によって「アジア・オセアニア地域国立図書館長会議」(CDNLAO)の開催が計画され；2005年には、第6回「国際敦煌学プロジェクト保護国際会議」を開催する予定である。

今回の業務交流で双方が「図書館協力」を討論の議題とし、両館の意思を十全に説明することは、我々の事業の発展に重要な意義を持ち、また、意思の疎通と協力の重要性を認識することは、図書館事業の共同発展の趨勢である。この共通認識は、両館のあらゆる協力関係を強化する前提となる。当館は両館の協力事業の前途に自信を持っており、更に広闊な協力可能分野が我々の共同開発を待っていると信じている。